５回目を迎える記念日「内航船の日」

「海洋文化社会」の芽はどこから？

全日本内航船員の会　松見 準

インターネット上で盛り上がりを見せていた「＃内航船の日」が日本記念日協会の認定を受けて５年が経ちました。内航船の日は、絵本作家の谷川夏樹氏が作品の題材で内航船を取材するうちに、なぜこれほど重要な社会的役割を果たす内航海運の存在が広く知られていないのだろうかとショックを受け、その思いをＳＮＳで発信した事が始まりです。

記念日「内航船の日」第５回目のチラシ

「７月１５日を内航船の日と呼びませんか」。７月１５日、７（ナナ）１（イチ）５（ゴ）、つまり、ナイコで内航船の日。海事関係者には思いもつかない明るさで呼びかけられ、共感する一般の人たちが全国に拡がり、ＳＮＳにハッシュタグ「＃内航船の日」が溢れ出しました。

私は、海運世界のための記念日が市民の側から贈られたことに感激しました。しかし一方で、当時は何かしらの違和感を感じていた事も覚えています。それはきっと、これまでの「海事思想の普及」と呼ばれる活動が、常に海事関係者の側から陸の社会へ向け投げかけられてきたものであったためではなかったかと今は思います。

記念日「内航船の日」を盛り上げるために「海から届ける写真展@大黒湯」を毎年開催してみて、私はこの記念日から多くの感動を得ることとなりました。会場の

ノートに書かれたコメントを船員たちに共有するなどしながら、市民社会と船員の距離が本当は近いことも知りました。

会場の銭湯（大黒湯・墨田区）のロビーでは、海運とは縁のない一般の方、大勢の老若男女が、船員たちの撮った感動的な夕日や朝焼け、貨物船のラッシュ、海峡通過、船員が働く様子などの写真に見入ります。その横には内航海運の解説パネルも設置しました。興味を持った方は、そのまま島国と物流をイメージし、各自のライフスタイルにまで重ねてくれます。「海洋文化社会」の芽は、海事関係者の側からではなく、島国住民と共に始まるのだと感じることになりました。

成長する記念日

「海から届ける写真展」は、海運現場と市民社会とが接する特別な場所となっていました。その奇跡のような成功に一安心した第一回目から、会場の外でも大きな変化が起こっていました。駆けつけた共同通信社の記者が「大変ですよ。ＳＮＳが『＃内航船の日』でいっぱいです」と教えてくれました。内航船の日は、ちゃんと盛り上がっていたのです。

今、「内航船の日」は、記念日という社会性を帯びたことで、より大きな市民社会の中で成長を始めました。その行方は誰にも分かりませんが、「内航船の日」は年々成長しながら、まだ誰も見たことのない海洋文化国の社会へ少しずつ導いてくれています。そんな市民社会に育まれながら、共に成長していく島国海運産業の未来。私たち海運関係者も「海洋文化社会」の夢を一緒に見てみませんか。

◇　　◇　　◇

なぜ「今」なのか

「内航船の日」の共感の背景に、内航海運関係者にとっても無関心ではいられない切実な危機意識があることは重要です。記念日を発起した谷川氏を動かしたのも、

乗船取材で知り合う船員たちの切実な思いでした。取材先の船員たちが内航海運の重大な社会的役割と責務について説明し、内航海運を知ってほしい事や船員不足の不安を語った事から始まっています。

２０１７年には、ＳＮＳで人気の内航貨物船船長に対して「現役船長の話を聞きたい」という講演の要望が膨らみ、東海大学が一般の人にも公開で講演会を実現させたことがありました。その時の「内航船現場の楽しみ方」を紹介する講演の中でも、船長が深刻な船員不足について触れ「まず、内航船がまだ一般的に知られていない状況こそが深刻なレベルである」と説明し応援を求めました。

翌１８年には、谷川氏の絵本「かもつせんのいちにち」がついに完成し発売。すると、この絵本が貴重な内航海運のＰＲになると考えた人々が、大量に購入し幼稚園や図書館に寄贈する現象も全国で起こりました。さらには、徳島や愛媛などの船処でも船主組合などが大量に絵本を購入して自治体に寄贈する流れへ発展しました。

他にも、エフエム大分の番組でＤＪ　ＮＡＶＥ氏が「内航船の日」や「内航船」にスポットを当てて内航海運をＰＲし、西日本豪雨で寸断されていた道路や鉄道の物流を補完すべく励む「内航船」の頑張りについて広くリスナーに伝える動きもありました。また、当時、一般大学の学生だった工藤航平氏も卒業論文のテーマに「内航海運」を選択し、研究内容を発表公開しています。

昨年に入ると、ＮＨＫ総合テレビ「鶴瓶の家族に乾杯」の番組内で、買い物帰りにたまたま鶴瓶さんに出会った若い内航船員が、その場で内航海運の船員不足を説明し、鶴瓶さんを船に呼び込みました。本当に船に乗っても良いのですかと尋ねる鶴瓶さんに、少しでも内航船の現状が広まってくれればと答えています。内航船の現場で共通の危機意識となっている船員の切実な思いが、このとっさの内航海運ＰＲ

にも現れています。

市民社会の中で発展する海運の未来

昨年８月、文化施設「アーツ千代田３３３１」（＝東京）で開催された「あけてみよう　かがくのとびら展」で、会場の白い壁面に谷川氏の巨大な内航船の絵が描かれているのを見ました（写真）。その前をお母さんと子供たちが行き来しています。都会の真ん中でこの光景を見て、産業の未来に期待と可能性が膨らみました。

東京都内に巨大な内航船の絵が出現

一昨年からは東京港埠頭（株）の職員さんからご提案をいただき「海から届ける写真展＠有明客船ターミナル」を共催。客船ターミナルでも展示を始めました。

開期中には、社会科見学に毎年約４０校の小学生約２０００人がターミナルへ訪れます（写真）。

リーフレットにはこのように書かれています。「内航船が全国に結ぶ航路。地域と地域が結ばれると、人と人との交流と深い歴史、文化も膨らんでいきます」。

昨年は神戸海洋博物館でも、谷川氏と鳥瞰図絵師の青山大介氏によって記念日イベントが開催されました。「海へ届ける絵画展」。

今度は、陸の側から海へ応援の気持ちを届けるぞと言うのです。

神戸海洋博物館「海へ届ける絵画展」

第５回目、写真展を断念

これまで東日本大震災、西日本豪雨など、緊急時の度に内航海運の重要性が認識されています。そして､今年は新型コロナウイルス感染症による緊急事態にあります。

今こそ内航船と内航船員の勇姿をイメージしてもらいたいところですが、残念ながら今年は銭湯のロビーでの写真展は開催できません。ＳＮＳで盛り上げることになります。

現在、７月１５日の記念日当日には Twitter のトレンド欄に「＃内航船の日」がランクインするまでに盛り上がっています。海運関係者の皆様からの応援、ご参加を期待しております。お願いいたします。（了